

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 11-1

現代の教師像

目次

子ども研究ノート(その1) 子どもにとっての教師	2
--------------------------------	---

調査レポート

現代の教師像

要 約	8
はじめに	12
1. 教師の子ども観	
●学年担任	13
●クラスの子どもたち	16
●今の子どもたち	21
●昔の子どもと今の子ども	26
2. 教師の取り組みと評価	
●ふだんの心がけと教育方針	32
●子どもに対するアピール	38
●教師の評価をめぐる	41
●トータルとしての評価	43
3. 教師の教育観	
●学年の違いから	46
●指導の難しさ、悩み	48
●教師の教育観	54
資料1 調査票見本および集計結果	56

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

子どもにとっての教師

静岡大学教授

深谷昌志

●教師のヘッドシップ

この号では、教師たちの考え方を問題にしようとしている。そこでデータの紹介に先だつて、子どもにとって教師がどういう意味を持っているのかを概観することにしたい。

日本の教師は権威を持っているといわれるが、考えてみると、日本でなくとも教師は権威を持ちやすい状況の中で生活している。なによりもまず、教師と子どもとの関係は、おとな社会の権威を代表した教師が、一定の知識や技術の習得を、被教育者である子どもに求めるので、教師の圧倒的な優位の形となりやすい。つまり、単なる、おとなと子どもの関係でも、おとなが優位なのに、教育者と被教育者の関係が加わるので、教師の権限はヘッドシップとよばれるほどの強さを持ち始める。

さらに、教育の行われる場、教室は、教師以外のおとなが入りこむことが少ない密室を構成している。考えてみれば当然で、学校内の他の教師はそれぞれの授業を担当しているし、校長などの管理職も、よほどのことがない限り教室をのぞくことはしない。したがって、通常の教室内で、教師はリリパットに住

むガリバーのような巨大な存在となる。

そうした密室文化も、授業参観や研究会などの折に公開されることがあるが、それは月に1~2度で、限られた時間内にすぎない。

さらにいえば、教師たちは朝早くから登校し、そして夕方、ときには夜遅くまで在校しているので、世間とのつき合いが乏しく、学校の中がすべてとなりやすい。もともと学校は、子どもたちを除くと、親ぐらいしか入ってこない閉鎖社会の性格が強い。しかも親たちは、担任から子どもを評価されるので、教師との間に純粋な人間同士といった横の関係を持ちにくい。

つまり、閉鎖的な学校の雰囲気の上に、密室的な教室の条件が重なり、教師の力はカリスマ的なものとなりやすい。しかも、学校や教室の中では、教師がそうしたカリスマ的なヘッドシップを合法かつ妥当に行使しているかどうかをチェックする機構に欠ける。そのため、教師はともすると、巨大な権限の持ち主である状態に慣れ、そうした力を持っていることを当然のように思い始める。

そうなると、力そのもの、そして力の行使を自戒する気持ちが薄れてくる。その結果、子どもたちを教える対象とみて、子どもを統





制する態度が強まりがちになる。

●教育者としての倫理

これまで、教師の否定的な面ばかりを指摘しすぎたのかもしれない。もちろん、実際の教室では、カリスマのように子どもたちに君臨する教師は決して多くはない、というより子どもたちの心に気を配りながら、学級を運営している教師を見かけるほうがむしろ一般的ですらある。したがって教師は、権威主義的になりやすい機構の中で毎日を送っている。それにもかかわらず、権威があらわにならない。それは、教師たちが教育者としての職業意識から、子どもと接するとき、子どもの心を開くためにも、子どもの背の高さにあわせた態度でのぞむ必要があると感じているからであろう。

つまり、すでにふれた教師のヘッドシップが行きすぎているかどうかを抑制するのは、教師自身の良識、あるいは職業倫理のように思われてならない。

こうした言い方をすると、歯止めのなさを憂うむきがあるかもしれない。しかし、専門職をイメージに置くと、良識への依存は決してまれな現象ではない。

例えば、われわれが医師にかかるとき、何の専門の、どういうキャリアの持ち主なのかを知らなくとも、その医師がベストを尽くしてくれるのを信じて患者となる。考えてみると、患者としては医師の良識や職業倫理——専門的な知識や技術を最善に駆使してくれる——に頼っているが、もしかしたら、その医師がベストを尽くさない場合もありうるのである。

もちろん、統計的に、圧倒的に多くの医師はベストを尽くしているし、そうであるから、医師に対する信頼が揺らがないのであろう。

医師に限らず専門職の中には、職業人とし

ての良識や倫理に、専門職としての支えを見いだしている場合が多い。そう考えてくると、教職が、教師の心のあり方に多くを依存しているのは、それだけ専門職に近い証しといえなくもない。

●子ども理解のむずかしさ

そこで問題となるのは、教師たちが、子どもの心を正確にとらえた上で、子どもの心を育てる態度や技術を、どの程度持っているかであろう。

教師の研修というと、国語や算数といった教科の領域が浮かんでくる。事実、公開研究会などの折に、教材研究にたくさんの人たちが集まる。「こん狐」にせよ、「大造じいさんと雁」にせよ、教材の解釈を深めることは、教師としての研修の重要な部分を占めるのはたしかであろう。

しかしそうした意味での研修は、脱学校論者として知られるベライターによれば、「知識や技術の伝達」機能であって、「子どもの世話」——「テイク・ケア」、心を育てる意味——的な面には結びつきにくい。なぜなら授業場面での子どもは、あくまで学習者としてとらえられ、どうしても理解力の良し悪しが、子どもを測るものさしになりやすい。そのため、トータルとしての子どもの像がつかみにくくなりやすい。

そうした傾向を裏がきするかのようには、授業のベテランといわれる教師が、授業場面で優れてはいても、その他の領域で、必ずしも子どもの心をつかみきれていない事例に接することが少なくない。

そうした問題が生ずるのは、授業中の教師は権威を持って、目標への到達を子どもに求めるのに対し、子ども理解は課題を与えたりするのでなく、素顔の子どもと接するところから出発するからなのであろう。





子どもの素顔をとらえるのには、下校してからの子どもを見つめるのが最善であろうが、学校内でも、昼休みや給食時、そして放課後などに、子どもの素顔があらわれてくる。子どもからすると、教師の目を忘れ、友だちとともに過ごしている時間帯である。

さまざまな雑用に追われる教師たちの生活を考えると、昼休みや放課後に、教師が子どもの輪に入るのには言うは易く、行い難い行為であろう。それに、ほんの1時間前まで権威を持って算数を教えていた人と、今度は権威を離れて、人間同士としてつき合うのは、教師も大変であろうが、子どものほうもとまどう。

そうしたむずかしさをかかえているだけに、子どもと接しているはずの教師が、かえって子どもの心をつかえない状況を迎えやすい。特に魅力的な教師であればあるほど、子どもたちは教師からよい評価を得たいと思う。そして、できる限り、よい面を教師にみせようとする。子どもたちのそうした心の動きは当然のものであろうが、それだけに教師は、ともすると裸の王様になりがちなかもしれない。

しかしあらためてふれるまでもなく、教授・学習過程が成り立つためには、学習者サイドに、学習しようという意欲が存在するのが前提となるし、そのためには学習者の心をつかむことが必要となる。教授する側の論理をいかにちみつに展開しても、学習者を欠いては、教授・学習過程は完結しないのである。

そう考えてくると、子どもの心をつかんで授業をすることが、それほどやさしくないのに気づく。しかし、「知識の伝達」と「世話」の両面を教師たちが満たしているかどうかを知るためには、子どもに尋ねるのが近道であろう。もちろん、子どもの声ですべてでないのはいうまでもないが、やはり教師の力をもっとも知っているのは子どもたちであろう。

そうした実態をふまえた上での教師論が必要となる。本号では小学教師の意識を分析対象としているが、中学生を対象として、子どもたちが教師をどうみているかの調査を実施した結果があるので、参考までに、それを素材として紹介することにしよう。

●中学生にとっての教師

教師と学習者との関係は、学習者の年齢により具体的な姿が異なってくる。そうした中で、もっともデリケートなのは、中学生と教師との関係であろう。

あらためてふれるまでもなく、中学生は子どもからおとなへの移行期にあたり、精神的に不安なまただ中に位置している。そのため、権威へのあこがれと反発とが複雑にまざり合う形となる。そうした否定面が強まると、対教師暴力の行使にもつらなる。しかも、高校進学を控えての悩みが加わるので、教師との接触はデリケートさを増す。

東京近郊の6中学の生徒約2,000名をサンプルとし、昭和60年5月に調査を行ったが、参考までに、高校生の協力も求めている。くわしくはモノグラフ・シリーズの中学校版「中学生のえがく教師像」(『モノグラフ・中学生の世界』vol. 23)を参照してほしいが、中学生たちにどんな教師が多いのかを尋ねると、「熱心に授業をする」(75.4%)や「教材の知識がしっかりしている」(71.9%、教師の半数以上が「そう」の割合)教師は半数近くを占めるという。しかし、「生徒の気持ちをつかんでいる」(44.4%)、「人間として尊敬できる」(43.2%)、「悩みごとを話しやすい」(21.4%)先生は少ししかいないらしい。

つまり、教師たちが熱心に授業をしているのはわかる。しかし人間として心が通い合うとはいいいくいのが、生徒たちの教師観のように見える。そして、そうした見方は的外れ



でないようで、中学教師に自分がどんな教師なのかを尋ねた結果でも、「熱心に授業をしている」(51.4%)、「専門の知識がしっかりしている」(40.2%)、「とても・かなりそう思う」割合が上位を占め、「人間として尊敬できる」(25.3%)や「悩みの相談にのる」(21.4%)は、下位に位置している。

もっとも、考えてみれば、教師の仕事は、何よりもまず授業をすることであるから、その授業に全力を注げばよいのであって、悩みの相談が下位になるのはやむをえないように思う。

そこで、表1に目を通してほしい。これは、担任から励ましやいやがらせをどの程度受け

表1 担任とのふれ合い

—よくも悪くもふれ合いに乏しい—

(%)

		1度もない	1～2度ある	5～6回ある	何回もある	数えきれないくらいある
励まし・親切	朝あったとき、先生のほうから声をかけてくれた	28.0	31.3	14.8	19.7	6.2
	みんなの前であなたの名前をいってほめてくれた	56.9	35.2	5.0	1.8	1.1
	困ったことの相談にのってくれた	69.1	23.7	4.0	1.9	1.2
	「がんばるんだよ」と声をかけ励ましてくれた	40.3	41.5	9.4	5.9	3.0
	体の具合のわるいとき、親切にしてくれた	50.8	37.2	5.8	4.6	1.7
	勉強のわからないところをこまかく教えてくれた	49.9	33.5	9.1	5.3	2.2
	放課後などにスポーツの相手になってくれた	79.0	11.7	3.5	3.0	3.0
ぶつ・いやがらせ	いくら手をあげても無視して指してくれない	59.1	26.1	7.0	4.2	3.5
	先生にげんこつでぶたれた	38.5	30.3	11.7	10.1	9.4
	先生から「バカだ」とか「おまえはダメだ」とかいわれた	66.5	19.9	4.4	3.7	5.5
	あなたの気にしていることをいっていやがらせをした	73.0	15.7	3.5	2.7	5.2
	みんなの前であなたの名前をいって叱った	59.4	26.4	6.2	3.6	4.5
	口答えをしたとあってぶたれた	83.3	9.7	2.1	1.2	3.7
	あいさつをしても返事をしてくれなかった	52.2	28.0	8.3	6.4	5.1

Q あなたは今の学年になってから、担任の先生から次のようなことをしてもらった、あるいはされたことがどのくらいありますか。



たのかを示しているが、さすがにふたれたとか、無視されたとかの割合は少ない。そうはいうものの「ほめてくれた」や「励ましてくれた」ことは1度もないとの回答も、半数近くの生徒から寄せられている。

したがって、よくも悪くも、ふれ合いに乏しいのが、中学生にとっての教師との関係になる。そうしたことを裏づけたかのように、担任が自分のことをどれくらい知っていると思うかを尋ねると、「成績」(76.7%、「とても・だいたい知っている」割合)はともかく、「好きなテレビ番組」(3.9%)、「つきたい仕事」(15.6%)など、その他のことはまったく知らないだろうが、かなりの割合を占める。

もっとも、生徒自身も担任がどこの大学を出て(17.0%)、どんな食べ物が好きなのか(9.8%)をまったく知らないという。つまり、教師が生徒のことを知らないだけでなく、生徒も教師について個人的な関心を寄せていない。いわば、教える教わるという関係があるにしても、人間的な交流のほとんどみかけられないのが、中学校での教師と生徒との間柄となる。

●どんな教師を求めているか

教師との関係が人間的なふれ合いに欠けるといっても、生徒たちは担任などに、それなりの感情を持ってしよう。そこで、いくつかのタイプを掲げて、担任になってほしい、ほしくないを尋ねると、「いじめがあってもだまっている」ような無気力な教師や「持ち物などをこまかく調べる」管理的な教師は敬遠したいとの反応が戻ってくる。

そして、実際にも、「よい先生に教えてもらい、勉強をする気になった」ことは2~3回しかないが、「先生が嫌いで、その勉強をする気がなくなった」のは何回もあると、生徒たちは答えている。

したがって生徒たちは、好きな、あるいは教えてほしい教師のタイプ、そして嫌いな、あるいは教わりたくない教師像をかなりはっきり抱いているのがわかる。

そこで生徒に、12のタイプの教師を示して、教えてほしい順に、1位、2位と、オーダーをつけてもらい、その平均値を求めると以下の通りとなる。

(平均値)

① ユーモアがある	5.09
② 人間として信頼	5.12
③ 生徒の気持ちをつかむ	5.40
④ 教え方がうまい	5.52
⑤ えこひいきをしない	5.65
⑥ 悩みごとを話す	6.13
⑦ 人間として尊敬できる	6.38
⑧ 学力をつけてくれそう	6.67
⑨ 熱心に授業をする	7.21
⑩ 教科の知識しっかり	7.82
⑪ 部活動を熱心に指導	8.19
⑫ 教育に信念を持つ	8.46

(いちばん望みたいのを1、2位を2としてランクされた結果)

「人間としての信頼」や「生徒の気持ちをつかむ」などの人間的な要素を教師に望む声が多い。それに対し、「教科の知識がしっかりしている」や「熱心に授業をする」への希望は下位にとどまっている。

この結果の解釈はデリケートで、熱心な授業に対する希望が低いのは、現実の教師が熱心に授業をしているので、それ以上の熱心さを望まないと考えるのが妥当であろう。それに反し、人間的なふれ合いは、もともとそうした希望が強いのに、親しみを持てるタイプが少ないので、なおのこと、ユーモアのある教師への希望が強まるのであろう。

くわしい統計的な処理は省略したいが、このデータを手がかりとして、数量化Ⅲ類の分





析を行い、生徒たちの望む教師像をまとめると、図1のような形になる。

そして、大多数の生徒たちが望んでいるのは、権威があって充足感を持てるカウンセラー型の教師である。親しさだけの親友型や教えるだけの予備校型に生徒の関心が集まっていないのに注目してほしい。

そろそろまとめに入ろう。こうしたデータを重ね合わせていくと、教師の目指している方向と生徒の求める教師像とがずれているのがわかる。端的に言って、生徒たちは自分の気持ちを理解してくれ、時には、励ましたり、支えたりしてくれる教師を求めている。しかし教師は、とにもかくにも、生徒たちを学習集団としてとらえるので、個々の生徒はその構成員にすぎなくなる。そのため、生徒の心のうちまで踏みこめなくなる。

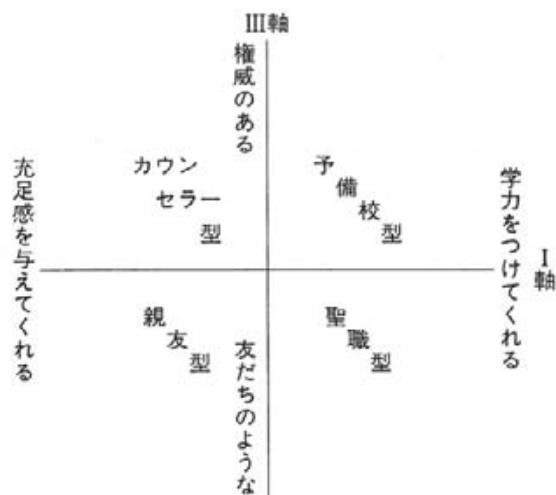
マクロな見方をすると、授業者としての力量では、日本の教師は世界の中でもトップの実力の持ち主であろう。特に、一斉授業の形

をとりながら、個々の生徒の反応をたしかめつつ、授業を展開していくありさまは名人芸の感すら受ける。そしてすでにふれた通り、生徒たちも、授業の熱心さについては高い評価を与えている。その限りでは、日本の教師は教師としての責務を十分に果たしているといえよう。

しかし、教師に人間的な心の通い合いを求める生徒の気持ちも、なんとなくわかる気持ちがする。授業をしつつ、その上に、生徒の心に気を配るなどというのは、難問のように思える。しかし、学校をとりまくさまざまな病理の出現を思い起こすと、授業者と同時に、カウンセラーの役割を果たすことが、今後の教師に望まれているように感じられてならない。

(本文は「岐路に立つ教師」(『現代のエスプリ』vol. 223 至文堂)の概説の部分に省略、あるいは補筆したものであることを付記しておく。)

図1 生徒の求める教師のタイプ



—数量化III類による—



調査レポート 現代の教師像 要約

静岡大学教授 深谷昌志
杉並区立杉並第六小学校教諭 土橋 稔
横浜市立鳥が丘小学校教諭 戸塚 智
目黒区立不動小学校教諭 矢部 崇

1. 学級経営

「とても」の3%を含めて42%の教師が、学級経営がうまくいっていると思っている(図4)。そして、そう思える教師はベテラン教師に多い。(表3)



2. 現代の子どもへの評価

現代の子どもは明るくすなおだが(図8)、食べ物をそまつにし、えんぴつがきちんと持てない子が多い。(図9)

3. 教師の子ども時代

外遊びが大好きで、教師の言いつけをよく守ったつもり。(図14)



4. 教育方針の基本

いけないことをしたらきちんと叱るのと、給食を子どもと食べるようにしている。(図21)



5. 個人的なふれ合い

教師の好きな食べ物など、個人的なことはあまり知られていない(図22)。しかし、知られている教師の学級はうまくいっている。(表8)

6. 教師としてのタイプ

明るく、ひいきをしないで、教育に熱心な教師のつもり。そして、若い教師は明るさに自信を持ち、ベテラン教師はひいきをしないに自信がある。

(表9)



7. 教師としての自己評価

教師として自分に80点以上をつける者は28%で、37%が70点くらいだと思っている(図23)。そしてベテランになるほど、教師としての自信が増加してくる。(表11)



8. 教師としての悩み

学校外の問題としては、家庭の教育力の低下がなんといっても気がかり(図25)。そして、学校内では雑用が多く、子どもの遊び相手になれない。(図26)

●調査概要

1. 調査主題 現代の教師像
2. 調査視点 個性化教育が求められ教師の役割も変化している。そうした教師像の変化、また子どもたちの変化をふまえ、教師

の教育観、子ども観などを探っていく。

3. 調査項目 最近の小学生について、教師の自己評価、指導上難しさを感じる点、教師をやめようと思った理由、など。
4. 調査時期 1990年6月
5. 調査対象 全国1,000校の小学校教師



9. 教師をやめようと思ったこと

やめたいと思ったことのない人は37%で、24%は何度もやめたいと思っている。(図27)

<全体として>

今回の調査を通して、意欲にあふれ、熱心に子どもを指導している教師たちの姿がうかんできた。とくにベテランの教師が、教師として自信にあふれているのが印象に残った。そして、身近な教師たちを見ている、その通りだと思う。

こうして熱心に指導しているのに、教師に対する社会的な評価は必ずしも高くはない。教師の意欲が空回りしているのか、それとも何か欠けるところがあるのか。そうした社会の評価と教師自身の評価とのギャップが気にかかった。



6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル 無作為抽出した1,000の小学校に調査票を6部ずつ送付。
- ・総送付数 6,000部
 - ・有効サンプル 1,141通
 - ・回収率 19%

サンプル数 (人)

年齢/性	男性	女性	計
30歳以下	168	167	335
31~40歳	201	278	479
41~50歳	78	156	234
51歳以上	40	53	93
計	487	654	1,141



はじめに

教師と児童の関係は、教室という、教師以外のおとなが入り込むことが少ない“密室”において成立している。したがって、単なるおとな対子どもの関係でさえおとなに優位である以上に、教える者と教わる者としての関係が加わるので、圧倒的な権限を教師が持つ可能性も秘めている。最近では、児童を“教わる者”から“学ぶ者”へと捉えるようになってきてはいるが、依然として教師たちの間には児童を教える対象とみて、統制したり強制したりする態度もみられる。

しかし、それでもかつての教師と児童の関係から考えると、最近の両者の関係は大きく様変わりしているように思う。以前は、教師の言葉は権威にみちあふれていた。というより、教師はむしろカリスマ的存在であった。したがって、当然のように休罰も行われてきたし、家庭でも子どもの教育については、学校にすべてお任せであったように思う。しかし最近では、子どもの人権が叫ばれる中で、教師たちは児童の個性を生かし、一人一人を大切にしたい教育を要求されるようになってきている。授業形態をとっても知識の伝達から学習の動機づけへと、教師の役割は変化した。児童も塾に通い、マスコミ等の多大な情報の中で生活するようになり、すべて学校から教えてもらっていた時代とは比べものにならない

いくらの知識を得ている。

このように考えると、かつて権威を持って児童の教育をリードしてきた教師像に変化がみられているのは、疑いのない事実であろう。そうした教師像の変化、また子どもの変化を、教師たちはどのように捉えているのだろうか。現代の教師の教育観、子ども観についてのアプローチを試みたのが本レポートである。

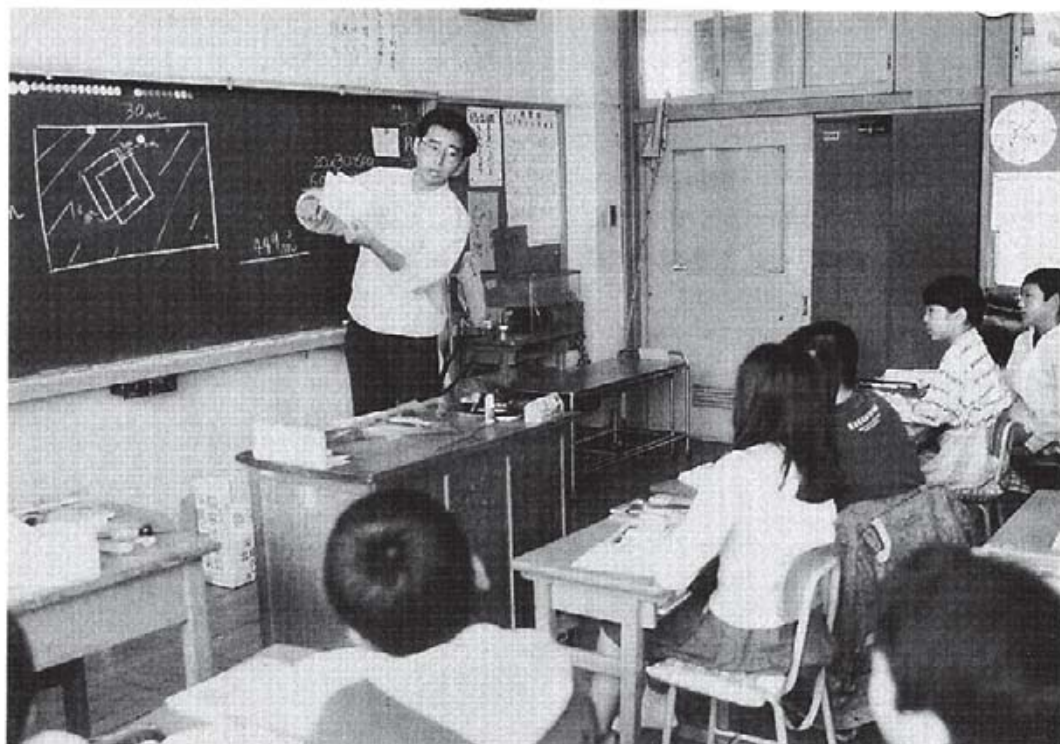
本調査の対象となった、全国から無作為に抽出された小学校1,000校の教師、計1,141名の男女・年齢構成は、以下の通りである。

男性教師	42.8%
女性教師	57.2%
30歳以下	29.3%
31歳～40歳	42.0%
41歳～50歳	20.5%
51歳以上	8.2%

教師の年齢構成をみると、親子ほども年齢の違う者たちが教師集団を形成していることがうかがえる。つまり、ある程度の年齢になると、自分が教師になりたての頃に教えた子どもたちが、今、同じ職業に就いているという状況もありうる。

本レポートでは、教師の年齢差も分析の軸の1つとして設定し、考察を試みることにした。

1. 教師の子ども観



■ 学年担任 IIII

サンプルの属性について、もう少しデータを紹介したい。先に述べたように、教師の構成年齢に大きな差があることを考えると、一人一人の教職経験年数も同様の結果が得られるのは、予想に難くない。それが図1で、経験年数の構成としてはほどほどに分散されているように思う。それを、男女別に整理したものが図2となる。経験年数が10年以下の教師の男女比は、ほぼ1対1で、男性も女性も同じくらいの数があることがわかるが、年齢が上がってくると、女性の教師の割合が高くなり、教職経験21年以上にもなると、男女比が1対2になり、3人のうち2人までが女性教師ということになる。

次に教師の学年構成をみたものが図3である。全体の構成のバランスをみると、調査対

象となった各小学校の協力で、各学年均等に調査を行っていただいたということがよくわかる。ほぼどの学年も全体の6分の1である。しかし、これを男女別にみると、やや様子が変わってくる。学年による男女差が大変あることに気づく。例えば1年生の担任は、男性教師が全体の6%であるのに対し、女性教師は23%もいるのである。先に示した男女構成比を考えると、1年生の担任の男女比は、 $42.8 \times 6.2 : 57.2 \times 22.8 \approx 1 : 5$ となり、1年生の担任は、6クラス中5クラスまでが女性の担任で占められているということになる。よほどの大規模校でない限り1学年6クラスということはないので、男性の教師が1年生の担任になることは、かなりまれなケースといえるのであろう。このような方法で、他の

学年についても同様の計算処理をしたのが表1である。上二段が全教師に対する割合で、下の段がその男女比である。2年生も男女比がほぼ1:4となり、1年生の結果に近い。この状態は中学年でも続くが、徐々に男性教師も増えてくる。しかし、これが高学年になると話は全く逆転していて、男性教師によって占められている割合が高い。6年生では、3クラスあれば、そのうち2クラスが男性教師が担任しているということになる。

学年構成については、もうひとつ興味深いデータがあるので紹介したい。表2に示した、教職経験年数とのクロスデータである。この表2によると、教職経験5年以下の教師は、

3・4年生を担当している割合が高く、41%である。年齢的にいえば、30歳以下の比較的若い教師である。そして教職経験を少し積んだ、6～10年の教師は、5・6年生を担当する割合が最も高く、この傾向は、教職経験が20年くらいになるまで続く。年齢的にいうと、40歳くらいまでである。しかし、教職経験を15年ほど過ぎた頃から、今度は低学年を担当する割合が増えてきていることに気づく。

つまり、教師としての経験がまだ浅いうちは中学年を受け持ち、少し経験を積むと高学年、そしてベテランは低学年を担当するといった傾向がみられる。

図1 経験年数

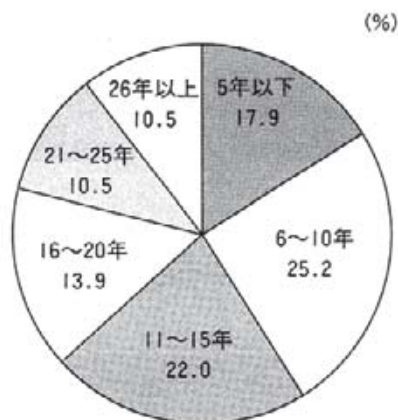


図2 経験年数×性差

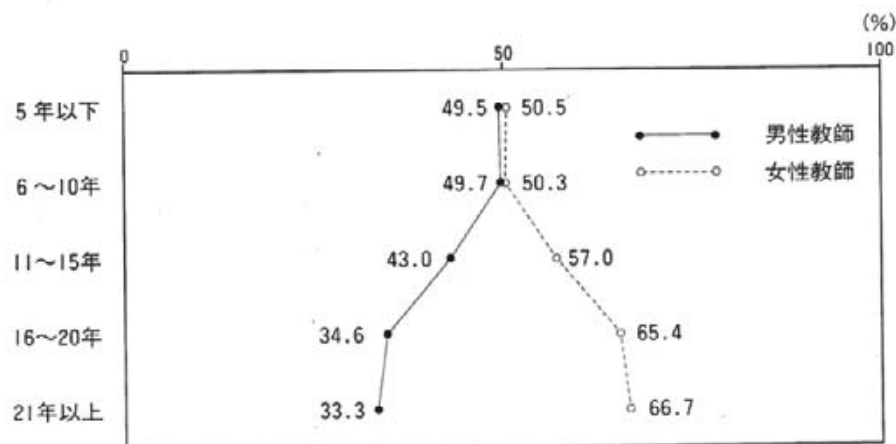


図3 学年構成

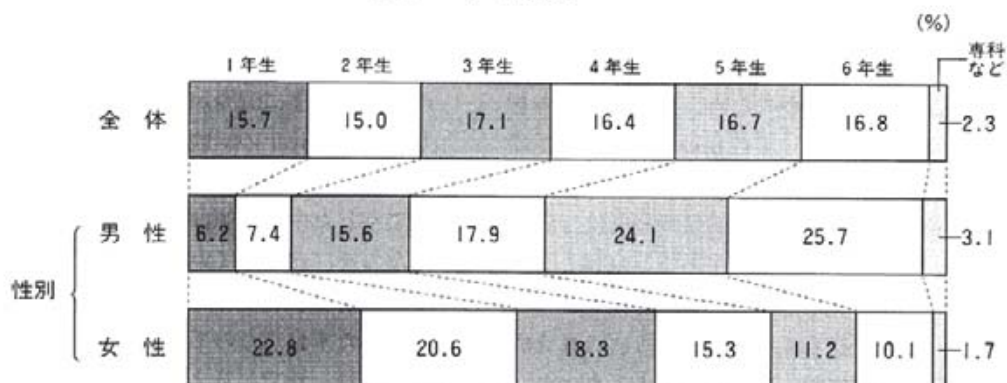


表1 学年構成と教師の性別

(%)

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	専科など
男性 (42.8%)	2.7	3.2	6.7	7.7	10.3	11.0	1.2
女性 (57.2%)	13.0	11.8	10.5	8.8	6.4	5.8	0.9
男性/女性	0.21	0.27	0.64	0.88	1.61	1.90	1.33

表2 学年構成×経験年数

(%)

	1・2年生	3・4年生	5・6年生
5年以下	28.2	40.7	31.1
6～10年	29.7	34.3	36.0
11～15年	28.0	35.0	37.0
16～20年	33.0	28.0	39.0
21年以上	39.3	32.9	27.8

○印はその項目の最大値

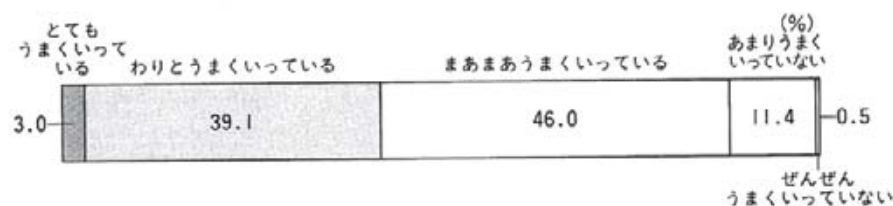
■ クラスの子どもたち Ⅲ

小学校の担任教師は、子どもと一日中一緒に生活している。そのため、自分のクラスをどんなクラスにし、子どもたちをどう育てていくか計画をし、実行していく。それがクラスの学級経営である。その学級経営について図4、表3のような結果がある。全体としては、9割近くの教師が「学級経営はうまくいっている」と答えている。しかし、これを教職経験年数で比較してみると、「とても+わりとうまくいっている」割合では、経験年数5年以下の教師の場合31%であり、次第に経験を積んでいくにしたがってうまくいっている

と答えた割合が増加する。経験年数21年以上の教師は、実に52%が自分の学級経営に満足している。長年の経験に裏づけされた自信や教育技術に由来するものなのであろうか。

こうした中で教師は、自分のクラスの子もたちを、どう見ているのだろうか。図5は、クラスにどんな子がどのくらいの割合でいるのかをたずねたものである。どのクラスも「晴れた日は、外で元気よく遊ぶ子」がたくさんおり、また「学校やクラスのきまりを守る子」や「先生のお手伝いを進んでしてくれる子」「元気よく、自分からあいさつのできる子」

図4 学級経営はうまくいっているか



が多い。「毎日のように忘れ物をする子」や「現在の学習や授業についてこられない子」は、ほとんどいないようである。

しかし、これを学年で追っていくと、若干の差がみられる。それが図6で、ここでは低・中・高学年の3つのデータを載せている。どの項目をとっても、低学年のほうが数値が高くなっている。特に低学年と高学年との差が大きい項目としては「晴れた日は、外で元気よく遊ぶ子」が低学年と高学年の差で33%あるのをはじめ、「先生のお手伝いを進んでしてくれる子」が同じく22%、「一生懸命そうじをする子」が同じく15%となっている。逆に差の少ないのは「学校やクラスのきまりを守る子」という項目である。学年が進むにつれて、天気がよくても外で遊ばなくなったり、

先生のお手伝いもあまりせず、そうじもさぼりがちになるというのが小学生の全体像で、もちろんこれに授業についてこられないようになるという要素が加わってくる。

これを、先の学級経営の結果とクロスさせてみたものが図7となる。学級経営がうまくいっていると答えた教師は、子どもの印象をこのようによい方向にとらえていることがわかる。子どもとの関係がうまくいっていると、教師の期待が子どもに伝わりやすく、そのために教師は子どもをよく評価する。ほめられると子どもは教師の期待に応えようとし、さらにはがんばる。一方、子どもとうまくいっていないと、どうしても子どもを厳しい目で見てしまい、子どもとの関係がさらに悪くなる。そんなことが推測される結果である。

表3 学級経営はうまくいっているか×経験年数

(%)

	とても+わりとうまくいっている	まあまあうまくいっている	あまり+ぜんぜんうまくいっていない
5年以下	30.8	47.7	21.5 ↑
6～10年	39.1	49.6	11.3
11～15年	43.9	44.8	11.3
16～20年	44.8	46.0	9.2
21年以上	52.2 ↓	40.9	6.9

図5 クラスの子どものタイプ

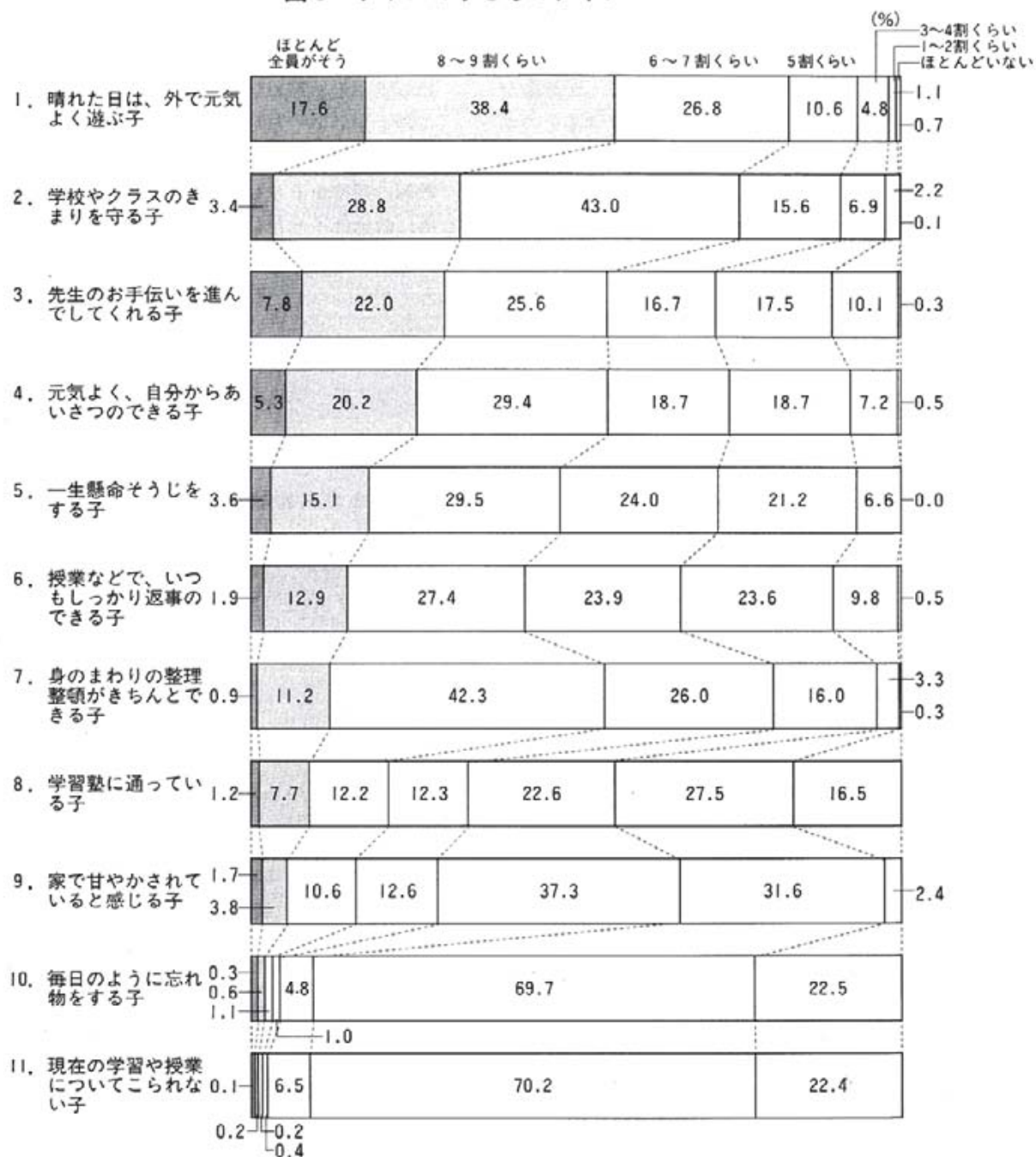


図6 クラスの子どものタイプ×学年

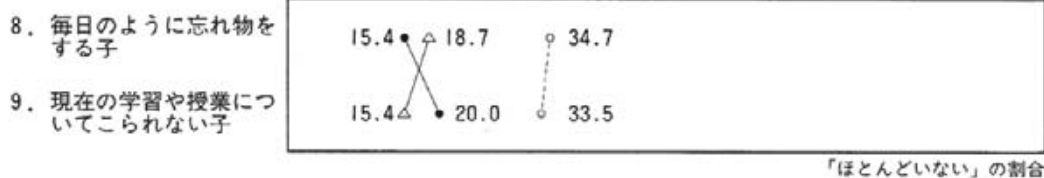
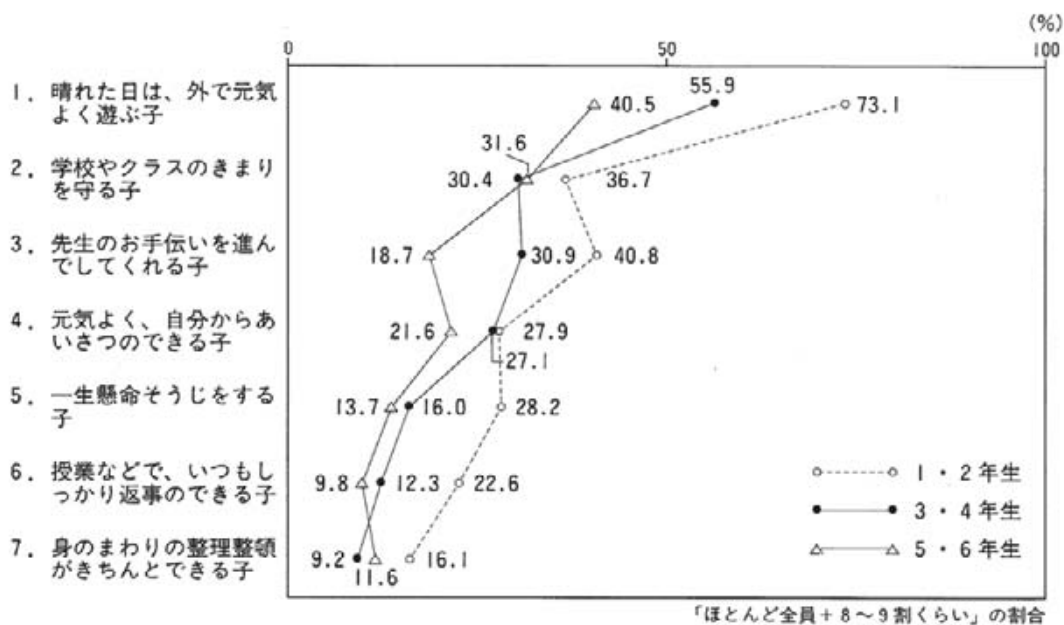
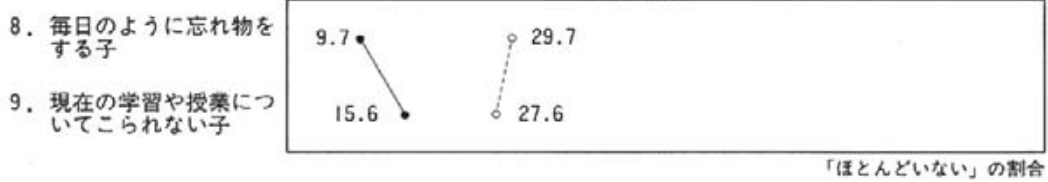
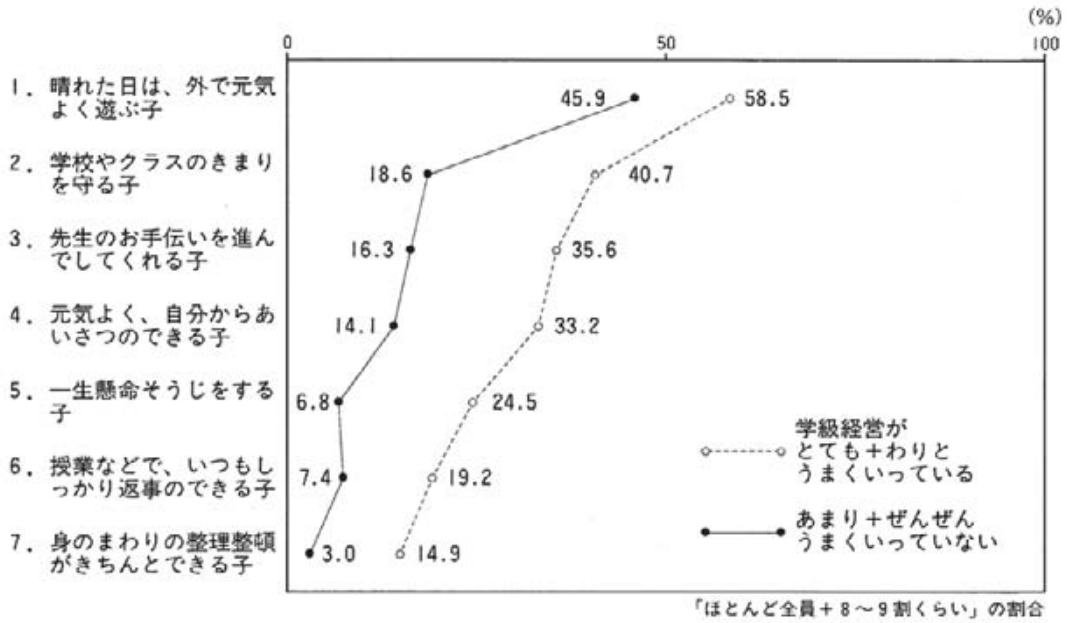


図7 クラスの子どものタイプ×学級経営

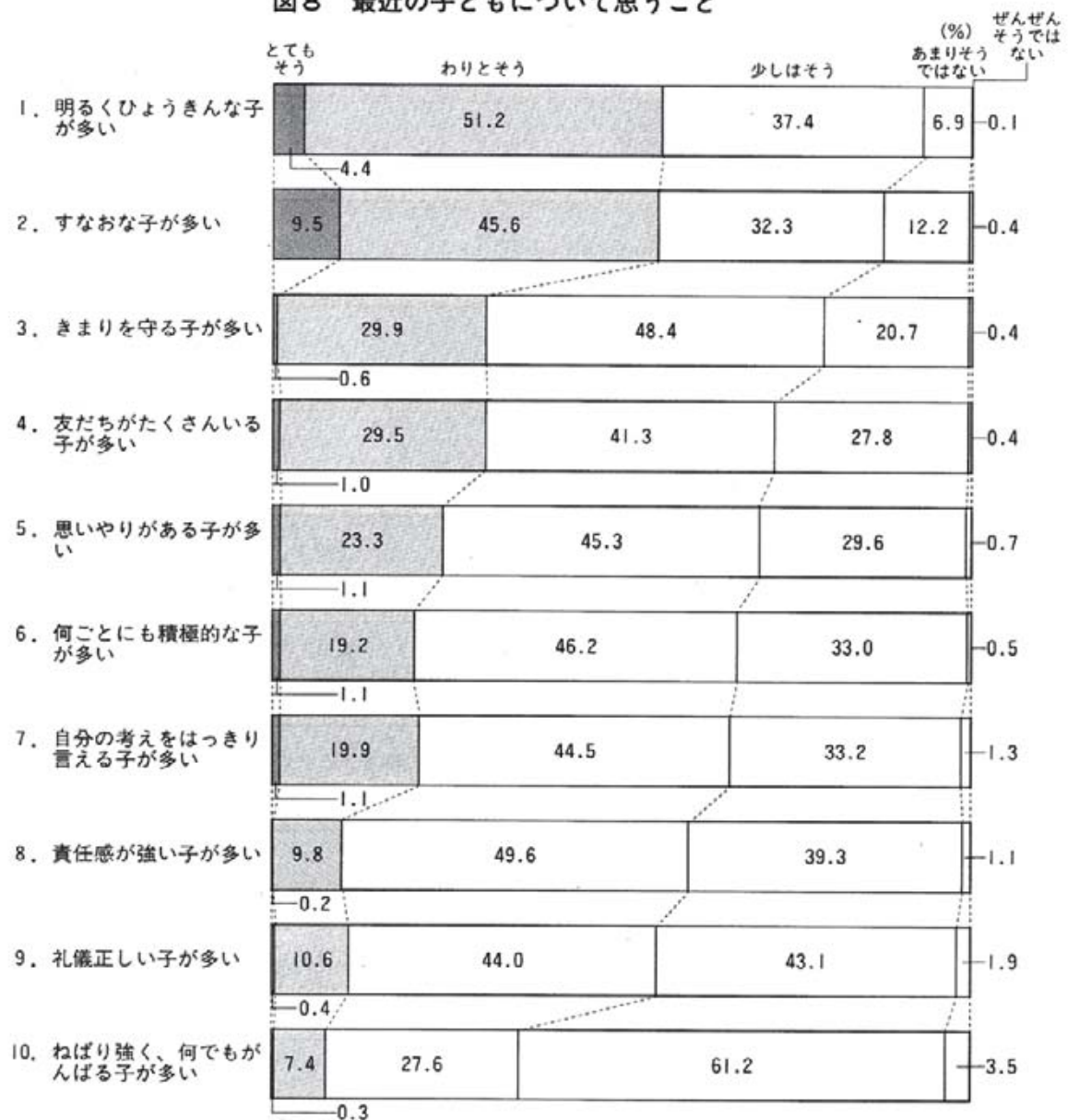


■ 今の子どもたち III

それでは次に、少し目を広げて、子ども全体について、どのような印象を教師が持っているかを明らかにしたい。図8、図9は「最近の子どもたちについて、どう思うか」をた

ずねた結果を示した。ポジティブな面(図8)については、「明るくひょうきんな子が多い」(「とても+わりとそう」の割合で56%)、「すなおなお子が多い」が55%で双璧となり、大き

図8 最近の子どもについて思うこと



くあいて、「きまりを守る子」「友だちがたくさんいる子」と続いている。残念ながら「ねばり強く、何でもがんばる子」は、8%と低い数値を示した。またネガティブな面(図9)では、「食べ物をそまつにする子」の64%を筆頭に、「えんぴつやはしがきちんと持てない子」(55%)、「精神的にひ弱な子」(51%)と続き、最下位は「学校の先生を尊敬していない子」の23%である。

この2つの図を比べると、ネガティブな面を扱った図9のほうが数値が高い。つまり、教師が感じている割合が高いことがわかる。悪い所ほど目立つというが、その通りの結果となっている。図10、図11は、男性教師と女性教師の子どもに対する見方の比較である。ところで教師は子どもたちがどんな子に育つことを願っているのだろうか。それを見ようとしたのが図12、図13である。

図9 最近の子どもの生活態度について

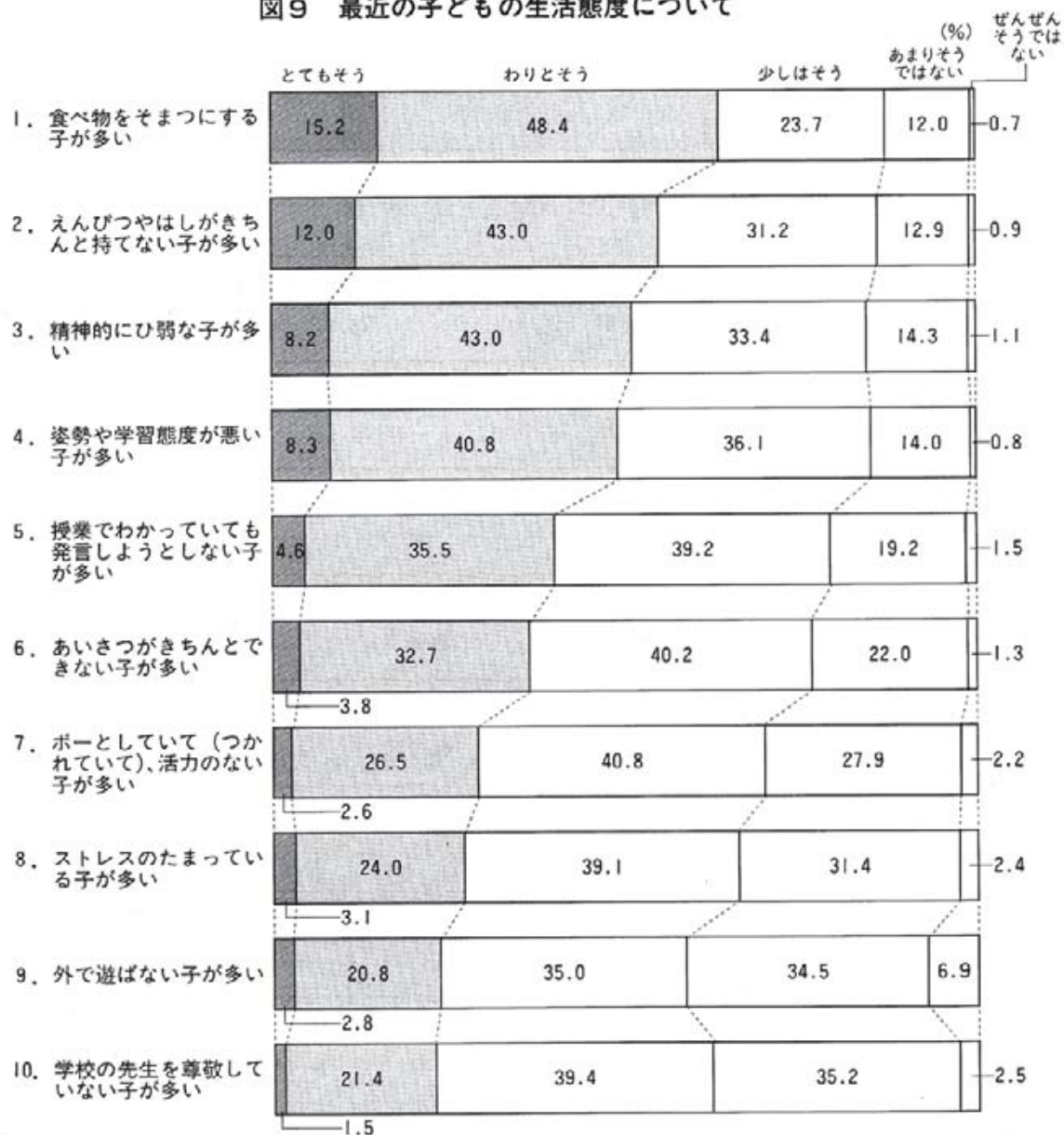
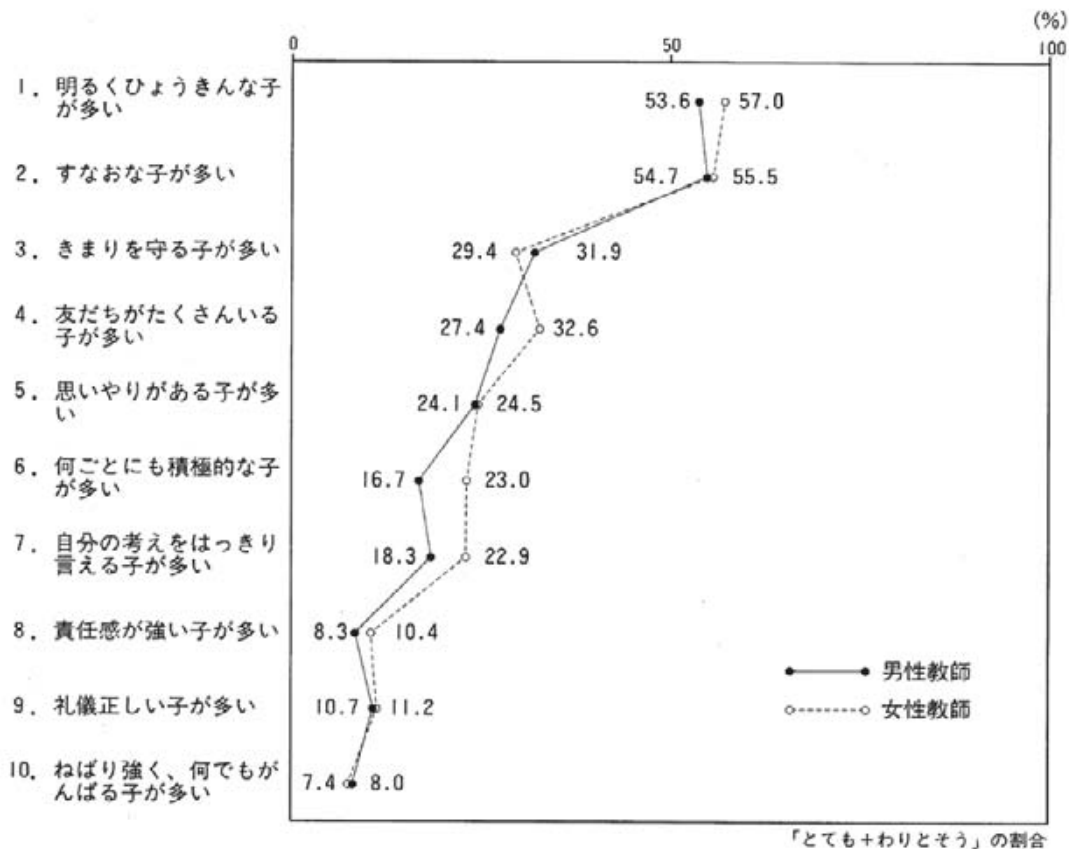


図12は、どんなタイプの子どもが好きかを答えてもらい、図13は、どんなタイプの子どもが嫌いなのかを答えてもらっている。まず、教師の好むタイプの子どもとは、「思いやりがあり、他人にいつもやさしくできる子」（「とても+わりと好き」の割合が99%）、「いつも明るく元気でほがらかな子」（98%）、「目立たないが、いつもまじめに努力している子」（97%）などである。言い換えれば、子どもたち

をこんな子に育てたいという子どもへの願いなのであろう。勉強の成績がよかったり、外見のいい子よりもあたたかい心を持った子どもに育ててほしいと教師は願っているにちがいない。図13は、嫌いな子どものタイプである。これによると「ひいきや仲間はずれを中心になってする子」（84%）、「弱い者いじめをする子」（83%）を圧倒的に嫌っており、こういう子どもに育てないように日々努力してい

図10 最近の子どもをどう思うか（その1）



ることになる。

図12、図13を見ると、やはり学級という集団の中での対人関係を重視しているとみることができる。そうした集団の中での心を育て

ていくことが、いずれおとなになったときに社会という大きな集団の中で生かされてくることになるはずだと、教師は考えているのである。

図11 最近の子どもをどう思うか（その2）

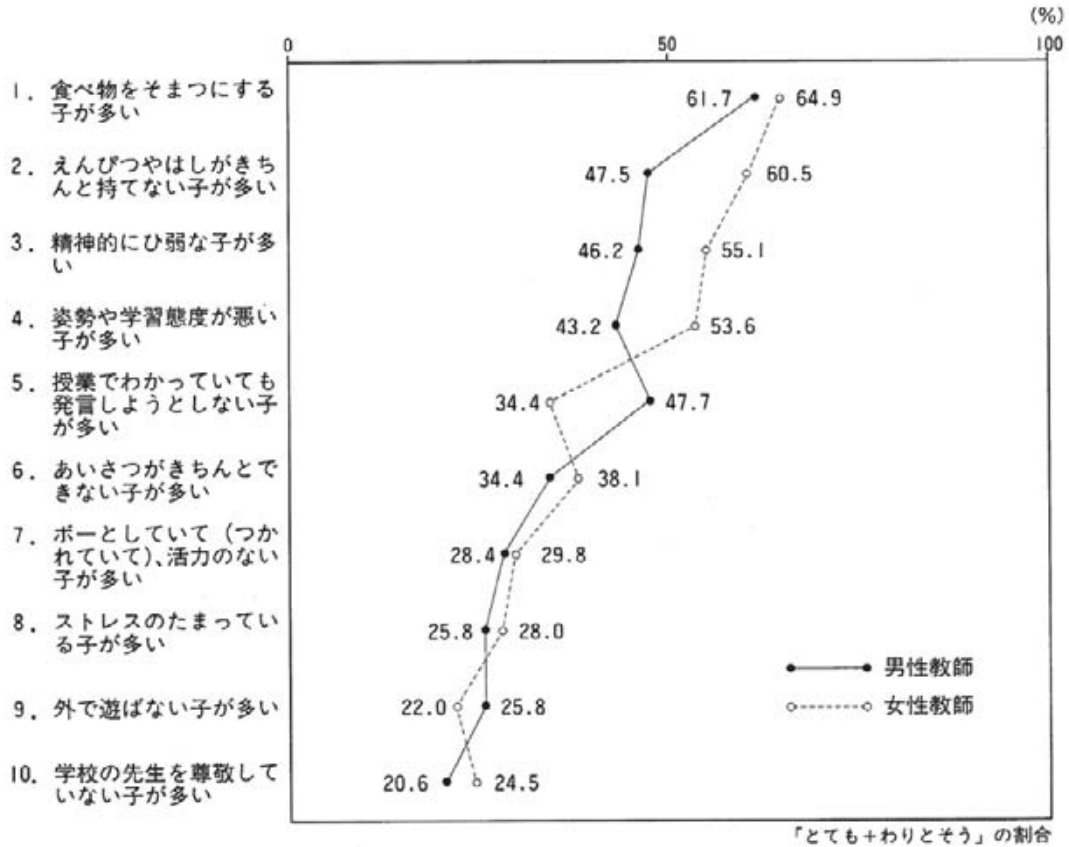


図12 教師の好きなタイプの子ども

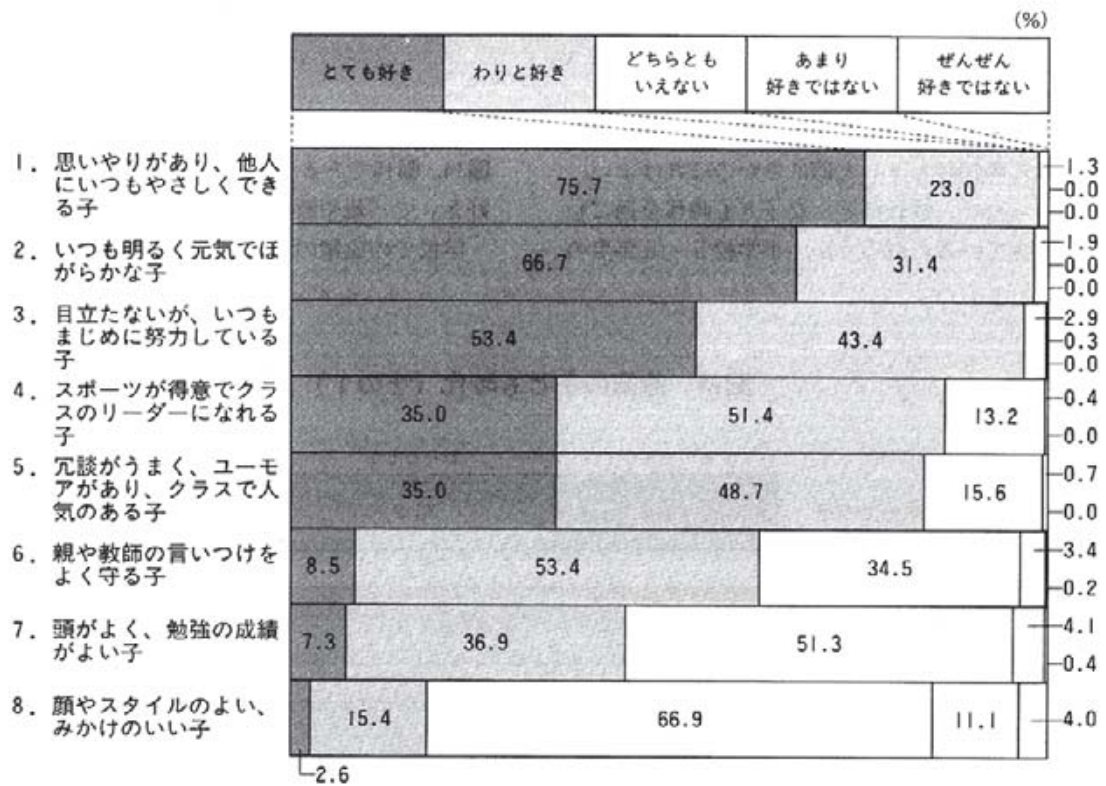
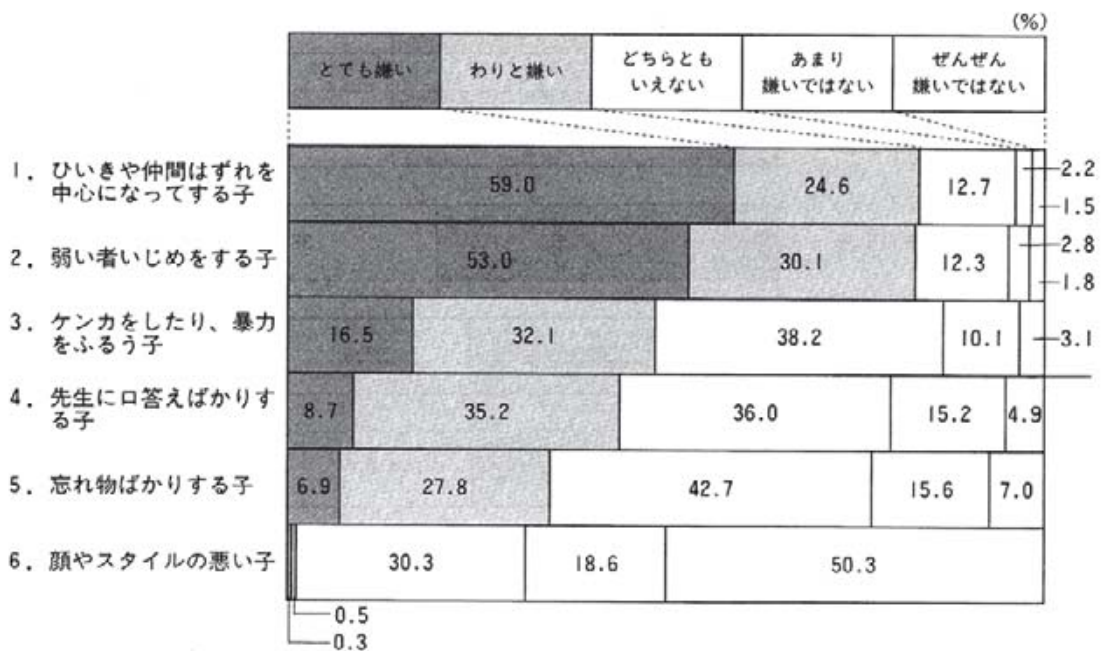


図13 教師の嫌いなタイプの子ども

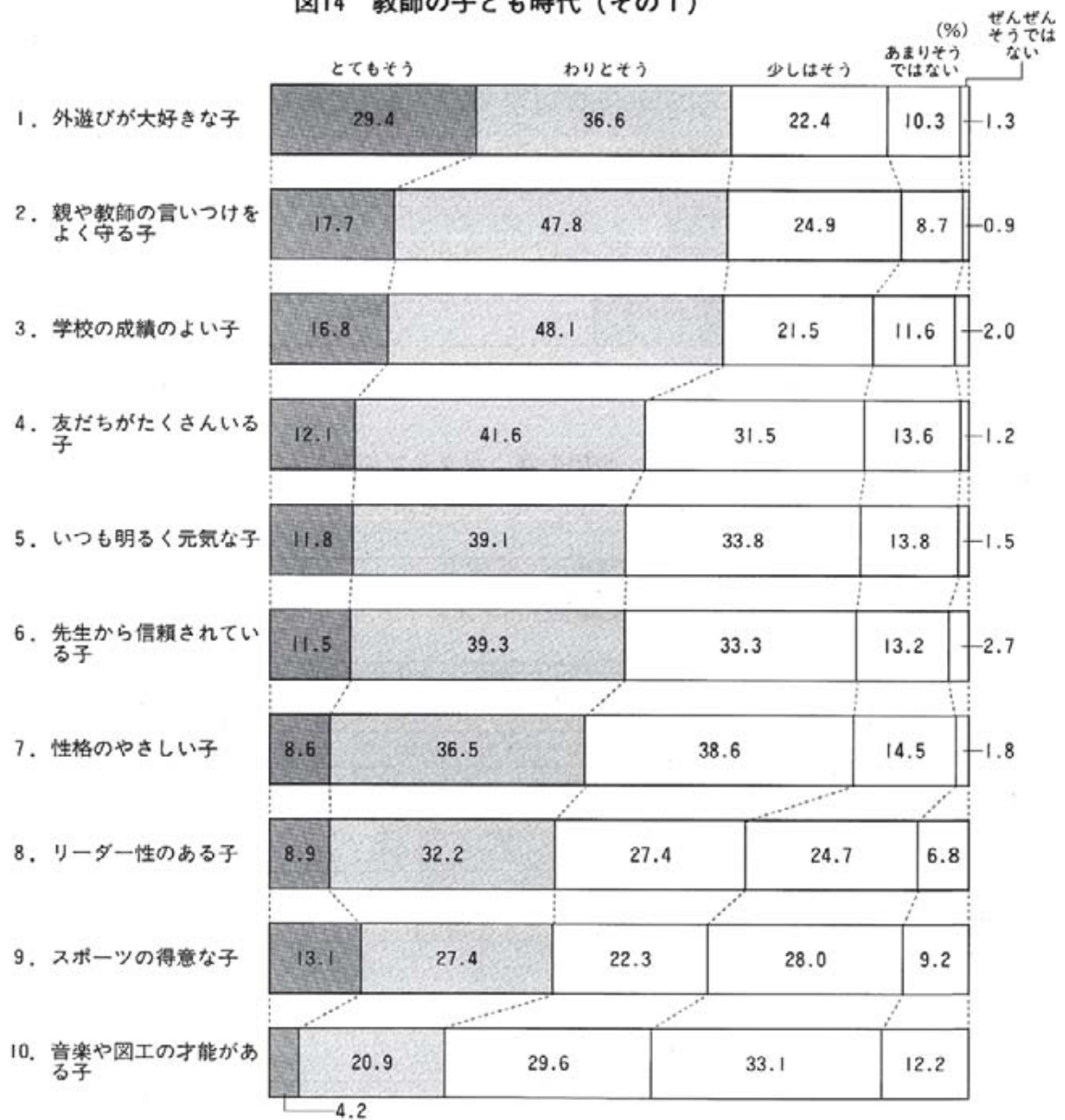


■ 昔の子どもと今の子ども IIII

教師も昔は子どもであった。若い教師ならほんの10年ちょっと前にさかのぼればよい。いったい、教師はどんな子ども時代を過ごしてきているのだろうか。小学校5・6年生の

頃、どんな子どもだったのかをたずねたのが図14、図15である。男性教師は、「外遊びが大好き」で「親や教師の言いつけをよく守り」「学校での成績のよい子」として小学校時代

図14 教師の子ども時代（その1）

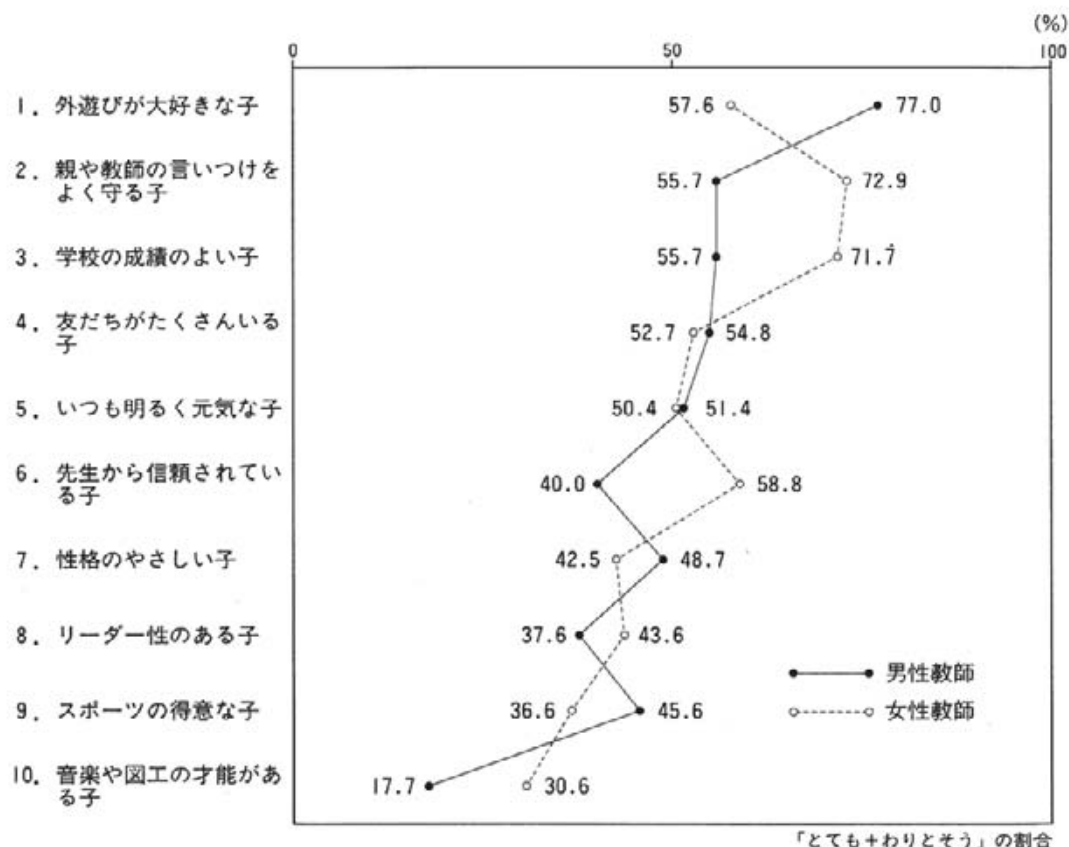


を過ごしてきた。女性教師は「親や教師の言いつけをよく守り」「学校の成績のよい子」で「先生から信頼されていた」ということである。

図16は、教師の子ども時代の体験である。ここにも図17に、男性教師と女性教師の比較を示した。先の図14にもみられたが、教師の小学校時代は成績がよかったとみえて、「テストで100点をとった」ことが「わりとある」ま

でを含めると、男性教師で56%、女性教師では66%である。続いて、「先生のお手伝いを進んでした」が同28%と44%となっている。一方、悪いほうの経験では男性教師の場合、小学校時代に先生からビンタをされたり(21%)、廊下に立たされたり(18%)して、けっこう叱られているが、女性教師の場合、この2項目も含めて、あまり悪いことをしたり、叱られたりした経験がないようである。いわ

図15 教師の子ども時代（その2）

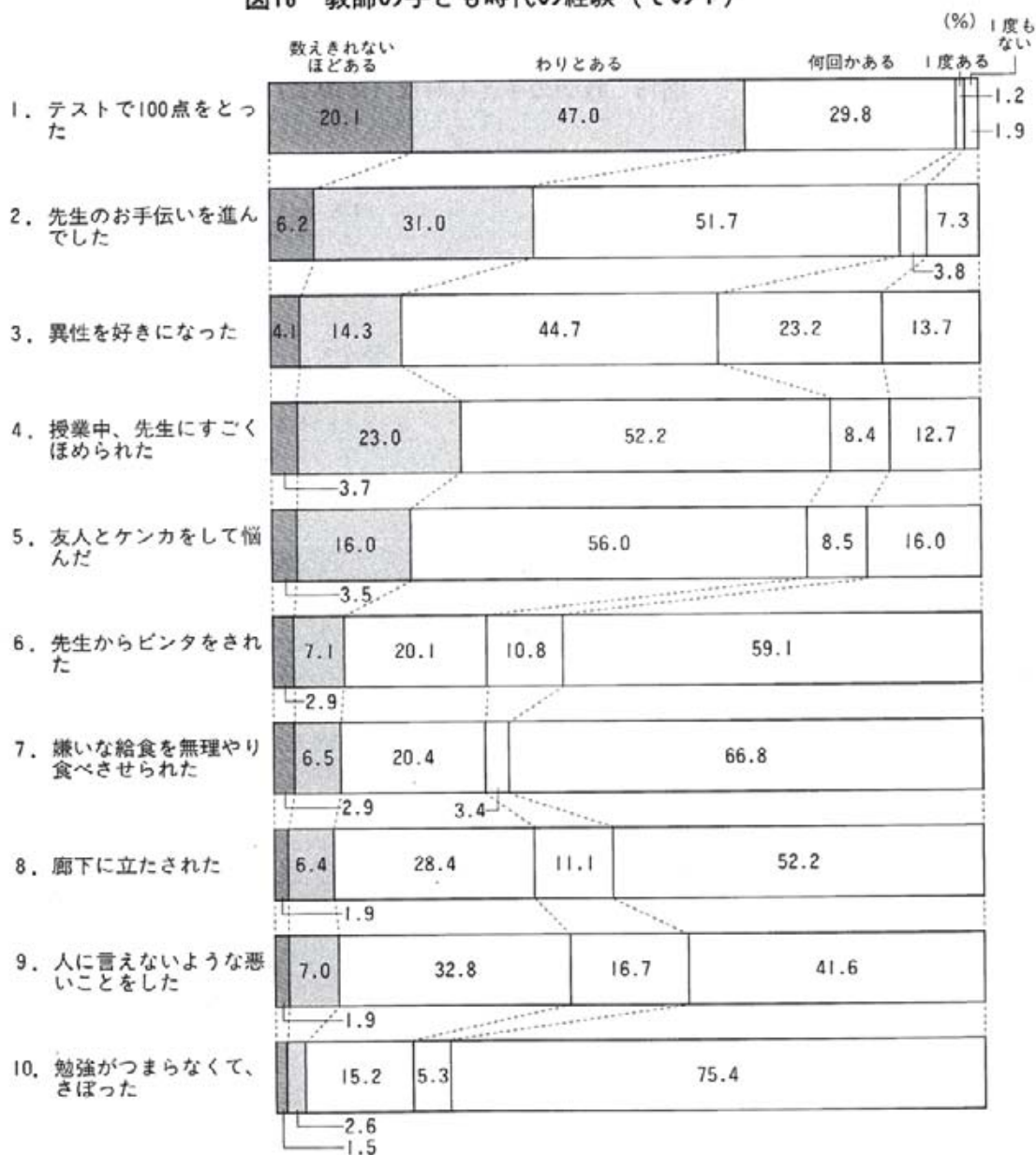


ゆる「いい子」として育ってきた女性教師には、自分の経験した小学校時代のイメージで子どもたちをみていくと、できない子やいたずらな子に対して、配慮が十分になされないのではないかという懸念もある。

さて本章のしめくくりとして、教師の小学生時代と今の小学生を比較してみた。図18に示すように、上のほうにランクされている項目の「楽器の演奏能力」「計算力」「発表力」

などは、今の子どもたちのほうが優れていると感じているものである。そしてほぼ中間の「文章表現力」「運動能力」は、ほぼ自分たちの子どもの頃と同じくらいであったというものである。その中で「創造力」や「読書量」は、やや下がっているとみている教師もわりといる。一方、下のほうに並んでいる項目は「やさしさ、思いやり」「お手伝い」「熱中する気持ち」「基礎体力」であり、これらは80%

図16 教師の子ども時代の経験（その1）



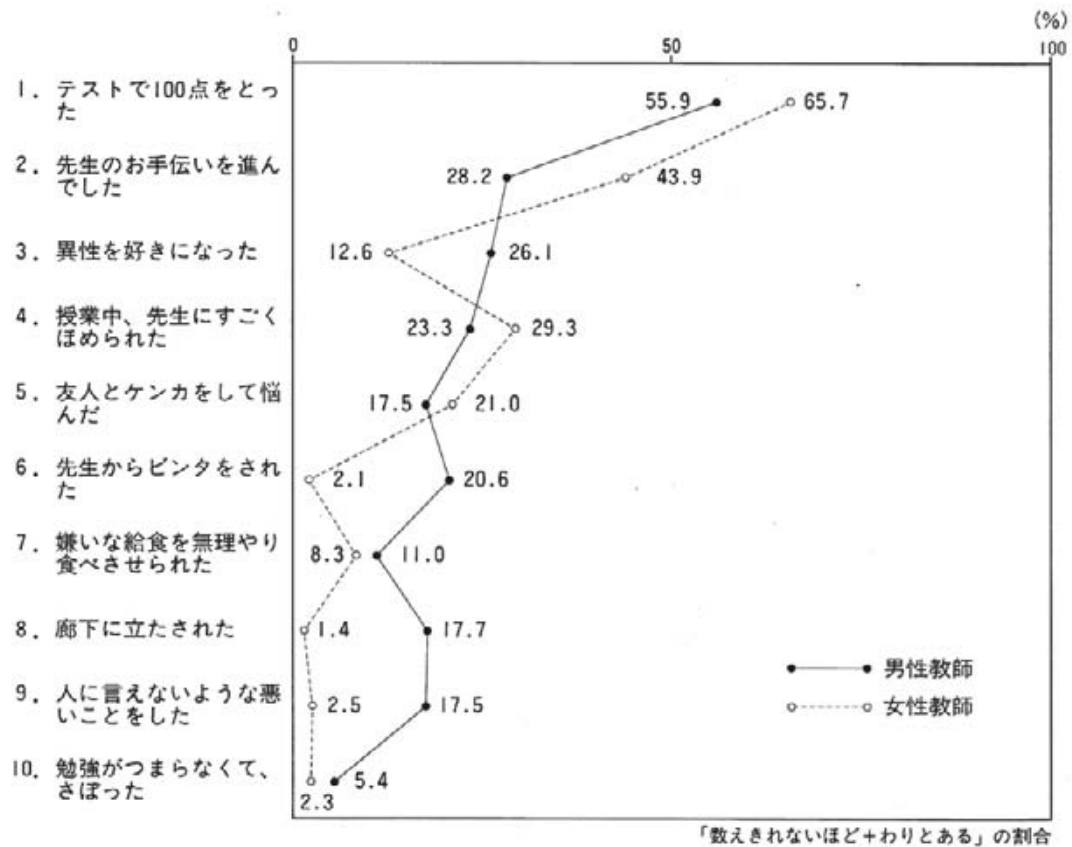
ほどの教師が昔よりも低下していると感じている。情報化の社会の中で、物事の処理能力は高まったけれども、人として生きていく力には欠けているのではないかとみているような結果である。

さて、一口に教師の小学校時代といっても、教師の年齢の開きとともに、その生きてきた時代には、大きな開きがみられる。そこで、教師の年齢別にいくつかデータを紹介したい

(図19)。30歳以下の教師といえば、まだ小学校を卒業して15年といったところであり、また41歳以上の教師は、卒業後30年以上たっている人たちの集団である。つまりその間には、少なく見積もっても15年以上の差があることになる。

図19をみると「楽器の演奏能力」については、年を経るごとに、子どもたちの技能が伸びてきていると感じる割合が高くなっている

図17 教師の子ども時代の経験（その2）



ことがわかる。2番目の「運動能力」については、41歳以上の教師は、「向上した」と答えた割合が60%となっているが、30歳以下の教師は、その割合が44%と、逆に「低下した」と答えた割合が増えてしまっている。31歳～40歳の教師は五分五分と答えている。3番目の「進んでお手伝いする気持ち」は、上の

2本とは異なり、右下がりの傾きとなっている。より年輩の教師のほうが「今の子どもたちはお手伝いをしなくなった」と感じている割合が高いことがわかる。

このように児童理解について、教師間でもその認識のしかたに、かなりの差があることをおさえておく必要があるだろう。

図18 教師の小学生時代と今の小学生を比べて

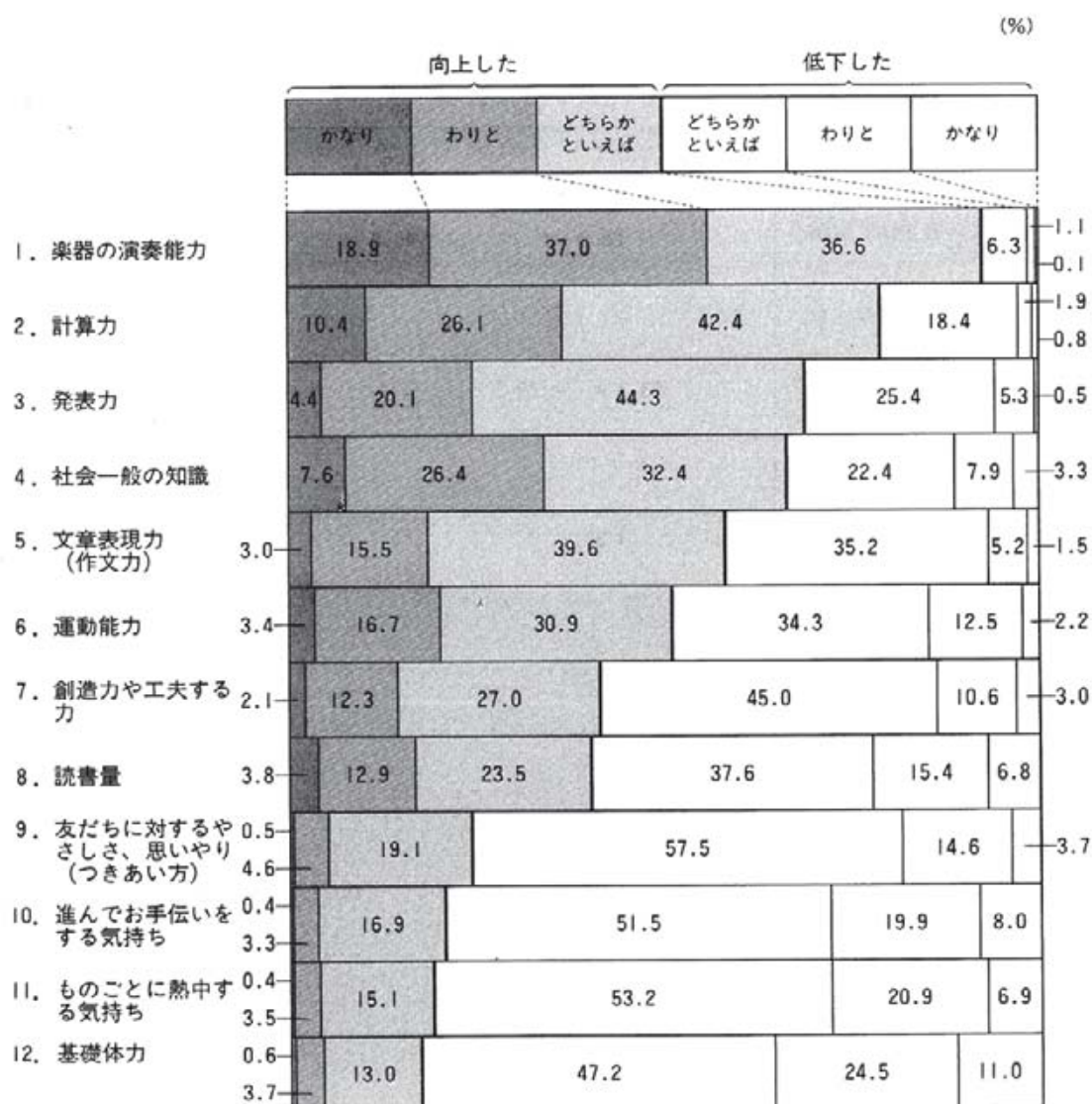


図19 今の小学生と比べて×教師の年齢

